

報恩寺の石造五輪塔

ほうおんじのせきぞうごりんとう



文化財愛護シンボルマーク

名称	報恩寺石造五輪塔	指定	兵庫県指定文化財
別称	報恩寺の五輪塔、報恩寺墓地の五輪塔	指定分類	建造物
数量	4基	指定名称	石造五輪塔 附 銅製蔵骨器 1、陶磁製蔵骨器 1
所在地	加古川市平荘町山角 466 番地 1	指定年月日	昭和 50（1975）年 3 月 18 日
所有者	報恩寺		

おうえい 応永十年塔

寸法	塔高(地輪 - 空輪) 161.0cm
材質	凝灰岩（竜山石）
時代	応永 10（1403）年 ／室町時代初期

しょうわ 正和五年塔

寸法	塔高(地輪 - 空輪) 184.6cm
材質	花崗岩
時代	正和 5（1316）年 ／鎌倉時代後期

無銘塔

寸法	塔高(地輪 - 空輪) 157.0cm
材質	花崗岩
時代	南北朝時代 （14 世紀）

じょうじ 貞治六年塔

寸法	塔高(地輪 - 空輪) 159.4cm
材質	凝灰岩（竜山石）
時代	貞治 6（1367）年 ／南北朝時代



報恩寺の石造五輪塔

（左から応永十年塔、正和五年塔、無銘塔、貞治六年塔）



応永十 (1403) 年塔



正和五 (1316) 年塔



無銘塔



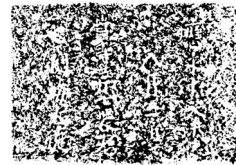
貞治六 (1367) 年塔

平荘町山角にある報恩寺は、和銅2 (709) 年に慈心上人が開き、13世紀末頃に證賢上人が再興したと伝えられている古刹です。中世の報恩寺は真言律宗の寺院として『西大寺末寺帳』に記載されており、寺院には当時の古文書や、石塔・石棺石仏をはじめとする数多くの石造文化財が存在しています。

この4基の五輪塔は、本堂の西から稲荷社に続く参道沿いに東を向いて整然と並んでいます。このうち、正和五年塔と応永十年塔の下からは蔵骨器が出土しており、いずれも報恩寺ゆかりの住持 (住職) の墓塔と考えられています。

4基のうち3基に紀年銘が刻まれているため、これらの石塔が鎌倉時代後期から室町時代初期にかけて造られたことがわかります。北から2番目の塔には銘文がありませんが、塔の形状からみて鎌倉時代末期から南北朝時代前半頃までに造られたものと考えられます。

いずれの塔も延べ石を組んだ基壇の上に建っており、応永十年塔のみが反花座基壇を2段目に備え付けています。石材は、花崗岩や地元産の凝灰岩 (竜山石) が使われています。よく整った全体の形や、各面に方角を意味する四方梵字を刻まないことなどは4基に共通している一方で、部材ごとの細かな形状を観察すると、それぞれの塔の造立時期を反映する特徴を比べることができます。



応永十年塔 地輪 (北面) 拓本・銘文

應永十未末
八月二日
當寺第七長老
利海大徳



貞治六年塔 地輪 (東面) 拓本・銘文

貞治六未丁
覺譽大徳
十月廿一日

これら4基の五輪塔は、中世の報恩寺や加古川地域の繁栄を伝える貴重な文化財です。また、鎌倉時代から室町時代にかけての五輪塔の移り変りを知ることができる、資料的価値が高い石塔群といえます。

五輪塔

中国の五大思想に由来する5つの部材 (下から地輪・水輪・火輪・風輪・空輪) からなる仏塔です。古いものは平安時代後期から造られますが、中世になると庶民仏教の浸透によって全国各地に広がり、供養塔や墓塔として建てられるようになりました。

(拓本/『加古川市史 第七巻』から転載、文・写真/古林)
※通番 36 号に正和五年塔の個別解説を掲載しています。

参考文献

『加古川市史 第七巻』加古川市 (1985年)

『加古川市史 第四巻』加古川市 (1996年)

●キーワード 五輪塔 報恩寺 真言律宗 紀年銘

●所在地 兵庫県加古川市平荘町山角 466 番地 1

●交通 J R 神戸線「加古川」駅発神姫バス「都台」行き「山角」バス停から北へ徒歩 3 分
車の場合は加古川バイパス「加古川ランプ」から北へ 5.5km